

# Philomusica Orchester Kyoto

Marie Joseph CANTERLOUBE  
Chants d'Auvergne  
Sélection

Sinfonie E dur  
Hans ROTT

京都フィロムジカ管弦楽団  
第18回定期演奏会  
2005年12月25日(日)  
京都府長岡京記念文化会館  
京都芸術センター制作支援事業

## ごあいさつ

本日ここに「京都フィロムジカ管弦楽団」定期演奏会を開催するにあたり、ご多用にも拘わらず、多数の方々のご来場をいただきまして、誠にありがとうございます。

この定期演奏会も、各回毎に新しい音楽の創造に挑戦し、はや第18回目となりました。今回は、指揮者に金 正奉氏をお迎えし、先生のご指導のもと、努力と研鑽を積み重ね、本日ここに魅力あふれる曲の数々を披露してくれるものと期待致しております。皆様にはその努力の結実を演奏の中にお聴きいただければ幸甚に存じます。

また、この度はカントループの歌曲をソリストとして、第13、14回に好演なさいましたソプラノの好本由希子さんをお迎えして、カントループの歌曲を共演していただきます。カントループと言えば、フランスのオーヴェルニュやケルン地方の民謡を採譜し、約20巻の楽譜に表し、また電気楽器オンド・マルトノをオペラで使用した作曲家でも知られています。そして関西初演でもある、大変珍しいロット作曲の交響曲第1番ホ長調は、楽譜の入手が大変困難な作曲家で、これを「フィロムジカ」らしい音色で演奏されますのも、大変興味深いところです。

最後になりましたが、「京都フィロムジカ管弦楽団」の為に、物心両面にわたるご支援を賜りました皆様方をはじめ、ご指導下さいました先生方に厚く御礼申し上げますと共に、定期演奏会のますますの発展を祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団顧問 和田之宏

「このフレーズはどこかで聞いたことがある」と思うことがあります。どこの何の曲だったかはわからないけれども、よく耳にするあのフレーズです。音楽を作曲するときその作り手が初心者であろうと大作曲家であろうと、作ったものが無意識のうちに過去の作品に似てしまうことはよくあります。そしてたまたま後発作品のほうが有名になってしまうと、そこでオリジナルを耳にしたとき、どこかで聞いたことがあるように感ずるわけです。元を作った人の気持ちは複雑でしょうが、広く親しまれるものにそれが発展したなら「うまく受け継いでくれてありがとう」とどこかで微笑んでいるにちがいありません。そんな思いを込めて今日は演奏します。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

京都フィロムジカ管弦楽団団長 長岡武志



NET 合宿・スキー スノボ・卒業旅行

大学生の団体・個人旅行を応援します！

# 日本教育旅行(株)

TEL:075-351-0405

<http://www.net.freeway.com>

担当：藤田珠里

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ 輸入・販売・修理・調整・製作

## イチイヒロキ Violin Shop

～ 強弱をもっと知り、楽しむ人へ～

◆イタリア、ドイツ製ヴァイオリンなど直輸入、品質には自信のある楽器や弓を良心的価格で揃えています。まずは手にとって御試奏を。

◆扱は格安価格にて通信販売。ケースその他、特価品有り、当店はただ売るだけでなく良いものをお奨めいたします。

楽器の音色の美しさ、するどさ、しなやかさ、表現の多様性から広がっていく音の世界。イチイヒロキViolin Shopはより深みのある、新鮮な音を目指して、あなたをサポートします。

営業時間：pm. 1:00 - pm. 7:00

定休日：(月・火)

◆〒602-0831 京都市上京区立本寺前町79

◆Tel: 075-251-0724

◆携帯：090-3628-0863

◆e-mail: [ichii@violinshop.jp](mailto:ichii@violinshop.jp)

<http://violinshop.jp>



# 京都フィロムジカ管弦楽団 第18回定期演奏会

京都芸術センター制作支援事業

2005年12月25日(日) 午後2時開演

1:15～ ロビーコンサート

京都府長岡京記念文化会館

## — PROGRAMM —

マリー・ジョセフ・カントループ・ド・マラレ (1879-1957) / 『オーヴェルニュの歌』より  
「バイレロ」「3つのブーレ」「オイ、アヤイ」「女房もちはおかしい」「カッコウ」  
Marie - Joseph CANTELOUBE de Malaret CHANTS D'AUVERGNE  
BAÏLERO/TROIS BOURRÉES/OÏ AYAÏ/MALUROUS QUO UNO FENNO/LOU COUCUT

ソプラノ：好本 由希子

## — 休憩 —

ハンス・ロット (1858-1884) / 交響曲第1番ホ長調

Hans ROTT Sinfonie Nr.1 E dur

I. Alla breve

II. (Adagio) : Sehr langsam

III. Frisch und lebhaft - Sehr langsam - Tempo di Scherzo

IV. Sehr langsam - Belebt

指揮 金正奉

携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器の電源は必ずお切りください。  
客席での飲食・喫煙・写真撮影・録音・録画、上演中の私語は固くお断りいたします。  
補聴器がまれに異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。

居酒屋

ごちんばやし

京都木屋町店

宴会  
コース

+500円  
(税込525円)

ドリンク  
飲み放題!!

TEL 075-257-4775

印刷のことなら

大地社

〒602-0858

京都市上京区河原町通荒神口上ル二筋目東入ル

TEL (075) 231-1727(代)

FAX (075) 256-4604

## ロビーコンサート

---

### グレゴリオ聖歌 “Puer natus est nobis (おさな児われらに生まれ)”

演奏：Pos.山下

…降誕の祝日のミサにおける入祭唱、つまり、待ち望んでいた主の降誕の日をいよいよ迎え「さあ、主に向かって新しい歌をうたおう！」と呼びかける歌です。この曲はグレゴリオ聖歌のオムニバス CD にしばしば収録されているので、ご存じの方もおられるかと思います。本来は男声による斉唱ですが、今回は教会にゆかりの深い楽器であるトロンボーンで演奏いたします。

### August Klughard/Quintett für Flöte, Oboe, Klarinette, Horn und Fagott, Op. 79

演奏：Fl.小松 Ob.山出 Kl.馬屋原 Fg.内等 Hr.坂口

…この曲は Allegro non troppo と Poco maestoso から成るソナタ形式の曲である。曲の冒頭の3本でつくる主題に答えるように奏でられるファゴットの旋律が印象的である。全体を通して個々の楽器が重なるように旋律を奏でてゆき、それによって重厚な響きと広がりが生み出されている。また再現部では担当する旋律が少しずつ変わっており、それによる響きの色の変化も聴き所である。

クルークハルト (1847-1902) はバッハゆかりの地ケーテンに生まれてドレスデンに学び、ワイマールの宮廷楽団の指揮者であった。リストやワーグナーの影響を受け、この第1楽章の経過句におけるクロマティックな和声の推移などに、当時の「新ドイツ音楽」に対する彼の傾倒ぶりがよくわかるが、しかしまたこの曲が明快なソナタ形式で書かれていることから彼が古風な形式感覚を持っていたこともうかがうことが出来る。(山出)

### Charles Grant/Mrs Jamieson's Favourite

James Scott Skinner /The Flower of the Quern

Nathaniel Gow /Mrs Hamilton of Pencaitland

作者不詳/From the New Country-The Blackthorn Stick-The Irish Washerwoman

作者不詳/Danny Boy

演奏：アイリッシュ・ファイブ (Vn.天澤 Db.鳥山 Cl.田中、萩原 Hr.吉野)

…フィロムジカでは一昨年、昨年とイギリス音楽を取り上げてプログラミングを組みましたが、その過程で出会ったのがアイリッシュミュージックです。編成も構成も、さらにはアドリブも自由なケルトの酒場音楽のようなジャンルですが、人と人とが接して同じ空間・時間を共有する場にふさわしい音楽だとは思いませんか。ロビーコンサートにもどうでしょうか。我々即席アイリッシュファイブが楽しんで演奏します。(天澤)

## 指揮者・独唱者

### 指揮：金 正奉 (キム ジョンボン)

1998年3月、大阪音楽大学作曲科卒業。のちに同大学専攻科で1年間指揮の勉強をする。卒業後、関西を中心に飯守泰次郎、広上淳一、本名徹次、現田茂夫、大勝秀也、山下一史、阪哲朗、牧村邦彦、金聖響の各氏らをはじめとして数多くのマエストロのオペラアシスタントとして活動。団体としては、関西二期会、ザ・カレッジ・オペラハウスなど。アシスタントだけでなくカルメン、こうもり、ヘンゼルとグレーテル、フィガロの結婚、夕鶴、他、主要作品の本番も指揮している。今年12月に喜歌劇学友協会できょうもりを指揮。

管弦楽ではエウフォニカ管弦楽団などと音楽鑑賞会を定期的に行っている。

作曲を田中邦彦氏、指揮をウィーン国立音楽大学の湯浅勇治氏をはじめ、金洪才、Ervin Acelの各氏に師事。



### ソプラノ： 好本 由希子 (よしもと ゆきこ)

京都市立芸術大学音楽学部声楽専攻、同大学院修了。卒業演奏会に出演。

米・ロチェスター大学イーストマン音楽学校夏季セミナーオーディションに合格しセミナー終了時に受講者選抜演奏会に出演。第5回さくらびあ新人コンクールにおいてさくらびあ大賞受賞、翌年同コンクールにおいて招待演奏を行う。コロンビア大学中世日本研究所の招聘により京都、ニューヨークにおいて献歌。他多方面でコンサートに出演。

オーケストラとの共演はC. ニールセン「交響曲・広がり」、F. メンデルスゾーン「真夏の夜の夢」、G. フォーレ「レクイエム」、R. ヴォーン・ウィリアムズ「田園交響曲」、A. ヴィヴァルディ「グロリアミサ」ソプラノソロなど。

草野道広、高須礼子、R. シェーン、釜洞祐子、益子明美の各氏に師事。



2002年度より3年間の任期で豊中市文化芸術センター基本構想・計画検討委員を務める。

ルミエール混声合唱団、奈良フロイデ合唱団 各ヴォイストレーナー、住吉コープカルチャー講師。

## 曲目解説

カントループ／『オーヴェルニュの歌』から

「バイレロ」「3つのブルー」「オイ、アヤイ」「女房もちがかわいそう」「カッコウ」

皆さんは民謡を聴かれることはあるだろうか。土臭いイメージがあって敬遠されがちではなかろうか。また素朴な音楽なので耳の肥えた現代人には退屈に聴こえるのかもしれない。しかし民謡とは長い歴史の中で歌い継がれ生き延びてきた音楽であり、非常に強靱な、人々に強く訴えかける音楽であると思う。これは音楽のエッセンスであり、源泉である。若いときにロックを聴いていた人が年を取るといつの間にか演歌を聴いている、というのもよくある話で、民謡の節回し、日本人ならばこぶしというのは我々の体に染み付いたアイデンティティーの一つなのかもしれない。

カントループは1879年リヨンの近くに生まれたが、そこはオーヴェルニュ地方をも含むフランスの中央山岳地帯であった。当然ながら彼の民謡に対する興味はここで育まれたのである。そしてスコラ・カントルム（音楽学校）においてダンディの薫陶を受け故郷の民謡を収集、編曲して後世に残すことに精力を傾けた。なぜこの時期に民謡なのかといえば、19世紀フランスの楽壇と大いに関係がある。当時のフランスにおいて、純音楽はベートーヴェンなどドイツ音楽一辺倒、オペラではロッシーニなどイタリアものがもてはやされ、フランス自国の作曲家の音楽が省みられることはほとんどなかった。この状況を憂いたサン＝サーンスらが1871年に『国民音楽協会』を創設し、フランス音楽の復興に努めたことに象徴されるように、19世紀末にはフランス自国の音楽が見直された。そして20世紀初頭のドビュッシューやラヴェルらの印象派、ミヨーやプーランクらの6人組からメシアン、プーレーズらの現代音楽へとフランス音楽は一気に花開くのである。このようなフランス音楽の復興の機運とともに、自分たちのアイデンティティーの再確認として民謡やクープラン、ラモーなどのフランス古典（バロック）音楽へと作曲家たちは回帰したのである。

《オーヴェルニュの歌》の特徴としては、「美しい」の一言に尽きる。何のことはないように見えるかもしれないが、もともと民謡は原始的な楽器による素朴な伴奏とともに歌われるものである。そのような民謡に華麗なオーケストレーションを施すということは、田舎でもんぺをはいて農作業をしているようなおじいさん、おばあさんにいきなりタキシードやドレスを着せる、といった具合で非常にミスマッチである。実際、ここで歌われている言葉はオック語（古南仏語）の流れを受け継ぐものであり、現代のフランス人が読んでも全く分からないほど方言や古語の要素を含んだ異質なものである。このような泥臭い民謡を見事に換骨奪胎して華麗な管弦楽絵巻、典雅にして牧歌的な田園劇に仕立てたところがカントループの功績であり、《オーヴェルニュの歌》がフランスだけでなく広く世界中の人々に愛される理由であろう。この曲はフランス音楽の特徴、お家芸の一つである精緻な管弦楽法の最上の例である。どこか懐かしくも美しい民謡の節回しももちろんであるが、オーケストラの細部にもぜひ注意して耳を傾けて頂きたい。

（曲目推薦者：Ob.OB 中西 充弥）

## ロット／交響曲第1番 長調

僕がロットの音楽に出会ったのはまったくの偶然の賜物だ。まだ高校生だった頃、いつものように学校から帰って昼間録音しておいたFM番組をチェックしていたところ、いきなり異様な音楽がスピーカーから鳴り出してびっくりした。ブルックナー狂徒である僕の琴線に触れる荘重で深い和声。しかしながら終始鳴り続けるトライアングルのトレモロが不気味な緊張感を掻き立てる。このとてつもない音楽に触れた瞬間の衝撃は今も鮮明に覚えている。僕がこのとき聞いたのがロットの交響曲の最後の部分だったのだ。「ブルックナーに学び、マーラーに影響を与えた」という解説を聞いて、なるほどと納得がいった。

ハンス・ロット。1858年ヴィーン生まれ。ヴィーン音楽院でブルックナーらに師事する。その生活は貧しく、オルガニストをして生計を立てていた。この交響曲はまず第1楽章が作曲され、音楽院の作曲コンクールに出品された。賞金が得られれば生活に余裕が出来たはずであったが、悲しいかな、無能な教官たちの失笑を買うだけの失敗に終わった。その後、ロットは残る3つの楽章を書き上げ、4楽章形式の交響曲とした。

師ブルックナーと同様に教会でオルガンを弾いていた人だけに、オルガンを思わせる分厚い響きやコラール（賛美歌）風の旋律の多様が特徴的である。各楽章で頻繁に用いられるフーガは、ブルックナー以上に宗教的な印象を与える。

楽器編成は、同時代のシンフォニストであるブルックナーとブラームスとほぼ同じ簡潔なものである。当初はチューバに最低音域を担当させていたが、改訂の際にチューバをカットし、かわりにコントラファゴットを導入した。この当時、チューバが使用された交響曲はブラームスの第2交響曲しかなく、そのブラームスも第3交響曲以降チューバの使用をやめてコントラファゴットを使うようになる。チューバが交響曲に使用される楽器として確立していなかった時代性を看取でき興味深いのが、逆に、撤回したとはいえチューバの使用を考えるとというところにロットの先進性をうかがわせる。しかし、楽器編成でもっとも特徴的なのはなんといってもトライアングルの多用である。全楽章で、トライアングルのトレモロが常に鳴り続ける。特殊楽器を使わない簡潔な編成だけに、トライアングルの突出がいつそう目立つ。シューマンがトロンボーンを多用したのは彼が幻聴にトロンボーンの音を聞いていたためだ、という説があるが、ロットも頭の中でトライアングルのトレモロが鳴り続けていたのではないだろうか。常に金属音が鳴り続ける、どこか狂気を感じる響きは、ロットが感じていた恐怖や不安を反映しているような気がする。

**第1楽章**はとりわけブルックナーの影響が強くみられる。弦の分散和音と木管の伸ばしを伴奏に、トランペットが弱音のソロを歌い、それにホルンのソロが答える、という出だしは、ブルックナーの第3交響曲と瓜二つである。この冒頭のトランペットの旋律は、全曲のあらゆる部分で少しずつ姿を変えて登場する。この主題の前半部分の要素は譜例①のように要素を解析できるが、これらの要素が形を変えて、たとえば第3楽章の主題（譜例②）となっていることがわかる。

**第2楽章**はアダージョ。ラ・ド#・ミの明るい和音の伸ばしが楽章の開始を告げると、緩徐楽章としてはやや動的な印象を与える3拍子の音楽が展開する。明るさの中に憂いの陰を秘めた音楽で、ブラームスを思わせるところもある。圧巻は楽章の後半で歌われる金管のコラールである。落ち着いた4拍子に変わり、譜例①aによって始まるコラールは、時間が静止したかと思われるほど静謐で長大

なものである。譜例①bによって締めくくられると、明るいミ・ソ#・シの和音が永遠に続くかと思われるほど長く伸ばされて終わる。マーラーの第2交響曲『復活』第4楽章のトランペットによる静謐なコーラルは、このロットのコーラルの影響を受けているに違いない。

第3楽章はスケルツォで、譜例①aを素材とする荒々しい金管のファンファーレで始まる。力強い合奏（譜例②）、宇宙と交信するかのような神秘的な楽想、レントラー（田舎の舞曲）風の朗らかなヴァイオリン・ソロなど、実に多様な要素が組み合わされた複雑で巨大なスケルツォである。ロットの音楽院時代の友人だったマーラーは、自身の第2交響曲『復活』のスケルツォに、このロットのスケルツォの主題をそっくりそのまま引用している（譜例③）。

第4楽章はこの曲最大の楽章であり、かつ最も強い印象を与える楽章である。序奏部分では、先行楽章の旋律の要素を用いて神秘的な音楽を展開する。この長大な序奏部を経て始まるフィナーレの中心主題は、ヴァーグナーの『タンホイザー』からの引用でありながら、聴く者誰しにもブラームスの第1交響曲のフィナーレを思い起こさせる雄渾さを備えている。譜例①cを素材とした行進曲など、様々な異なる楽想がコーラージュ風に組み合わせられる。コーラージュ風のフィナーレとしてはベートーベンの9番という偉大な先例があるが、ロットの終楽章はそれを凌ぐ多様性と巨大さを持つ。これはブルックナー5番・8番、マーラー6番、ショスタコーヴィチ4番といったコーラージュ風フィナーレの傑作群を先取りするもので、その時代離れした前衛性は驚異と言うほか無い。楽章の後半では、ブラームス風の中心主題と譜例①が対決するように絡み合って壮大なクライマックスを形成する。しかし、最後は譜例①aがこだまのように呼び交わしあいながら静かに閉じられる。

ロットはこの交響曲の楽譜を音楽界の実力者・ブラームスに見せ、評価を得ようと試みる。ところが楽譜を見たブラームスは、この作品が盗作であるとの疑いを持ち、ロットを拒絶した。43歳にしてようやく第1交響曲を書いた晩成のブラームスにしてみれば、22歳のロットがこのような破格の交響曲を書いたということは信じがたく、また、心情的に許されざることであったのだろう。ロットはこのショックで発狂し、精神病院に入院。何度か自殺未遂を繰り返した後、1884年に結核で死亡した。わずか25歳であった。ロットの第1交響曲で全曲を通してけたたましく鳴り続けるトライアングルの金属音は、来るべき悲劇を知らせる警鐘のようにも聞こえ、痛々しい。

こうして音楽史の闇に葬り去られたロットという作曲家は、近年マーラーの評価が高まるにつれて、マーラーとの関連性がある作曲家として注目されるようになった。しかし、ここで強調しておかなければならないのは、「ロットがマーラーに似ている」のではなく、「マーラーがロットに似ている」ということである。ロットの交響曲の成立時期をわかりやすく年表にすると次のようになる。

1875年、ヴァーグナー『タンホイザー』ヴィーン上演／1876年、ブラームス『第1交響曲』初演／1877年、ブルックナー『第3交響曲』初演、ブラームス『第2交響曲』初演

1878～1880年、ロット『第1交響曲』作曲

1881年、ブルックナー『第4交響曲』初演／1882年、ヴァーグナー『パルジファル』初演／1883年、ブラームス『第3交響曲』初演／1888年、マーラー『巨人』（第1交響曲の初稿）完成

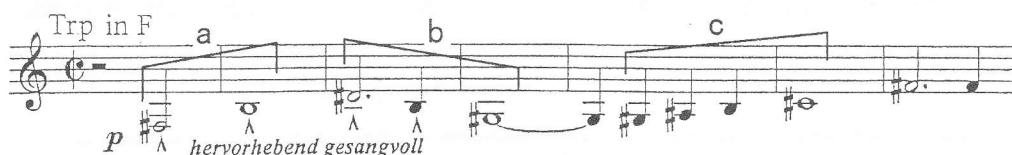
これを見れば、ロットがいかに時代に先んじていたかがわかる。とりわけ、ブラームスの第3交響曲がロットの交響曲よりも後に書かれた作品だということが注目される。ブラームスの第3交響曲の



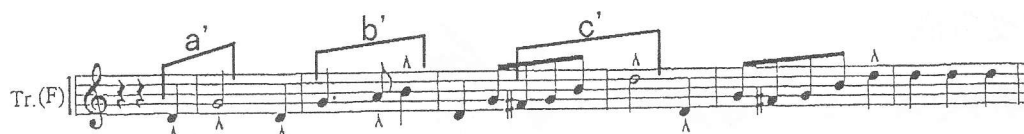
終わり方は、細かな要素に分解された第1楽章の主題がこだまのように呼び交わしあいながら静かに閉じられる点でロットに似ているが、これもブラームスがロットを引用したということになる。ロットを盗作者呼ばわりしたブラームスが、実はロットを盗作していたのだ。僕はここでブラームスを糾弾するつもりは無い（ちなみに僕はブラームスの音楽も大好きである）。僕が強調したいのは、周囲の冷たい仕打ちによって偉大な芸術家が若くして消されてしまったという惜しむべき事実である。僕たちは練習中しばしば、「ロットが長生きしてもっと多くの交響曲を書いていたらどんな音楽になっただろうか」という話をした。そのたびに、ロットが若くして消されたことの損失の計り知れない大きさを思い知らされた。おそらくロットのように不当な評価を受けた偉大な才能はほかにも数多くいたことであろうし、また、今時分にも我々の周囲にいるに違いない。我々音楽を愛する者は、演奏するという行為を通して、聴くという行為を通して、偉大な芸術家たちを擁護し、偉大な作品を次代に伝えていく責務があるのではないだろうか。本日の我々の演奏が、ロットという偉大な芸術家がいたことを知らしめ、その優れた作品を次代に伝えていくことの一助となることを願ってやまない。

(曲目推薦者：Tp. 遠藤 啓輔)

譜例① ロット 第1楽章より



譜例② ロット 第3楽章より



譜例③ マーラー 交響曲第2番『復活』第3楽章より



太陽堂グループ

舞鶴 宮津 小浜

事務局：舞鶴市字福来1111の2 TEL：0773(77)2710



## 京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

- |         |         |         |         |        |
|---------|---------|---------|---------|--------|
| 村上 治子様  | 松村 正人様  | 小林 香様   | 鎗本 和弘様  | 中西 充弥様 |
| 川野 浩之様  | 南方 一晃様  | 杉本 幸子様  | 谷口 佳隆様  | 信広 澄子様 |
| 岩佐 聖子様  | 津田 篤太郎様 | 大原 達也様  | 船橋 恭子様  | 村岡 昌子様 |
| 田中 直子様  | 越後 千代様  | 安藤 美知穂様 | 竹本 真理子様 | 横田 洋子様 |
| 村山 義尚様  | 渡辺 一真様  | 稲村 董雄様  | 高橋 順子様  |        |
| 村山 明日香様 | 渡辺 由加理様 | 遠藤 時金様  | 村田 紀子様  | ほか6名様  |
| 渡辺 真人様  | 渡辺 晴菜様  | 奈倉 道和様  | 三木 敏弘様  |        |
| 渡辺 和美様  | 河上 由香里様 | 倉田 八重子様 | 岡本 幸雄様  |        |
| 松村 里香様  | 井ノ山 敏江様 | 井谷 宏美様  | 岡島 敦子様  |        |

2002年4月に発足しました「友の会」は、上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(2005年11月現在)



## 平成15年酒造年度 全国新酒鑑評会 金賞受賞蔵

### 金賞受賞酒

# 純米大吟醸 一吟

英勲の酒造りに対する情熱と最高の技で作りに上げた究極のお酒です。全量酒造好適米「山田錦」を使用し、極限までに磨き上げ、淡麗さとデリシャスな吟醸香が優雅さを引き出した純米大吟醸酒です。

各木箱入り・税別価格

1.8L詰 10,000円 720ml詰 5,000円



## 酒の芸術

全国新酒鑑評会7年連続金賞受賞

〒612-8207 京都市伏見区横大路三栖山城屋敷町7番地



# 齊藤酒造株式会社

<http://www.eikun.com/>

# 京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Orchester Kyoto

## Konzertmeister

天澤 天二郎

## Violine

天澤 天二郎

越後 美和

岡島 裕香

大薄 智樹

小幡 拓也

川島 仁子

佐多 久美子

千熊 由紀子

西村 祐司

水野 紗綾

横山 考太郎

渡邊 達之輔

飯田 俊也※

越後 真理※

大浦 一馬※

喜多 ちひろ※

桑田 昌宏※

須田 謙史※

津田 卓郎※

高橋 広※

田原 靖子※

前川 信幸※

榊田 亜紀子※

見渡 あおい※

本吉 達郎※

## Bratsche

西村 浩輔

相澤 悠※

井村 有里※

折原 貴道※

谷口 絵美※

田原 明子※

松本 一輝※

森 静香※

## Violoncell

小林 豪

多田 進

小野田 税※

小松 正明※

塚田 毅※

矢野 卓也※

## Kontrabaß

合田 祐子

鳥山 拓

内村 彰吾※

小塚 智沙代※

関 大輔※

竹田 佳都頭※

## Flöte

江藤 佳美

加藤 勇仁

川崎 浩世

小松 朋美

## Oboe

石原 才子

山出 涼子

## Klarinette

上高原 千寿子

田中 慎一郎

萩原 潤

馬屋原 隆広

## Fagott

内等 すずえ※

西田 誠※

## Kontrafagott

中田 毅※

## Horn

芦原 俊平

片山 真吾

坂口 裕志

阪本 一浩

長岡 武志

吉野 文彦

呉 哲庸※

海塚 威夫※

## Trompete

遠藤 啓輔

竹内 恵理

中西 美智子

南出 和彦※

山口 鮎美※

## Posaune

益田 繁幸

山下 大介

奥山 あや※

南 昌明※

## Tuba

塚田 淳一

## Pauken

安岡 祐子※

## Triangel

佐々木 藍子※

## Klavier

小石 みなみ※

※印：客演奏者

## 顧問

和田 之宏

## 団長

長岡 武志

## 事務局長

西村 浩

## 弦トレーナー 吉野 美穂

京都市立芸大卒。ヴァイオリンを木村直子、岸辺百百雄、室内楽を種田直之、河野文昭、久合田緑の各氏に師事。

## 管トレーナー 山崎 雅夫

京大卒。京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC.マクベス、A.ハーゼス、M.アンドレの各氏に師事。

# 京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

## ♪ 第 19 回定期演奏会 ♪

2006 年 6 月上旬を予定 会場未定

シューマン／交響曲第 4 番      ベートーベン／交響曲第 3 番『英雄』

## ♪ 第 20 回定期演奏会 ♪

2007 年 1 月 21 日 (日) 京都コンサートホール (大ホール)

マーラー／音詩『巨人』(交響曲第 1 番ハンブルク初演稿) ほか

## ♪ 新入団員随時募集中 ♪

募集パート：ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス、  
オーボエ・ファゴット・ホルン・打楽器

※管・打楽器はオーディションがあります。

※コントラバスは団所有の楽器があるため、楽器に関しては相談に応じます。

詳しくはお問合せください。

Tel : 090-8163-4626 (専用携帯電話 担当・竹内)      E-mail : recruit@kyotophilo.com

## ♪ 「友の会」会員随時募集中 ♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

【年会費】 1 口 1,000 円      【期 間】 ご入会いただいた月より 1 年間

【特 典】 1. 期間内の定期演奏会に、1 口につき 1 名様を無料ご招待

2. その他演奏活動のご案内

3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ      Tel&Fax 075-605-0123 (西村)      E-mail : tomo@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ      <http://www.kyotophilo.com/>

## クラシック音楽の海外公演・国際交流

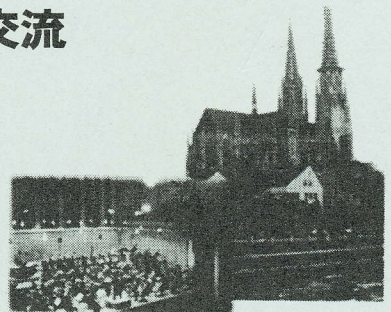
海外での公演・国際交流は、現地でのマネジメントが大切です。  
弊社は日本のオーケストラの海外公演・国際交流を、真の意味で成功させて参りました。  
海外公演・国際交流のお手伝いはおまかせください。

### 最近の海外公演実績

岡山県桃太郎少年合唱団ドイツ公演98年8月(レーゲンスブルク大聖堂他)  
京都市民管弦楽団ヨーロッパ公演99年5月(ウィーン・ムジークフェライン大ホール他)  
彦根市ベルリン第九演奏会実行委員会99年12月31日(ベルリン・SFB放送大ホール)  
ルーマニア トゥルグ・ムレシュ パッハ生誕200年記念コンサート2000年5月(文化宮殿)  
同志社大学交響楽団ヨーロッパ公演2001年3月(グラーツ・ステファニーザール 他)  
同志社大学交響楽団ヨーロッパ公演2004年3月(プラハ・ドヴォルザークホール)

ホームページ : <http://www.mitsuma.com/>

協力会社 : ルフトハンザドイツ航空会社、全日空、JTB、近畿日本ツーリスト、AIU保険会社



(社) 日本クラシック音楽事業協会会員

(株) ミツマ・ミュージックプロダクツ

〒605-0009 京都市東山区三条通大橋東入ル大橋町102 田中ビル5F Tel.075-761-1213 Fax.075-752-5568